

平城宮若犬養門付近出土の小札甲

はじめに 第133次調査の際に平城宮南面西門（若犬養門、SB10200）付近から出土した鉄製小札は、都城中枢における数少ない出土事例ということもあって、これまで奈良時代初めの基準資料として注目されてきた（津野1998など）。しかしながら『1981 平城概報』には「挂甲小札」が出土したという記述があるのみで、これまでその全貌はあきらかでなかった。このたび、2012年度飛鳥資料館春季特別展「比羅夫がゆく―飛鳥時代の武器・武具・いくさ」への出陳を機に、整理の機会を得たのでここに報告する。

出土状況 小札は、平城宮内の池状遺構SG10240から若犬養門の西を南流する南北溝SD10250と、宮南辺二条大路北側溝SD1250が合流する地点の溝埋土最下層から、折り重なった状態で一括して出土した。SD1250からは藤原宮式の瓦や平城宮Ⅲ・Ⅳの土器、神亀3年（726）から神護景雲年間（767～770）までの紀年木簡など、多様な遺物が出土している。

資料の概要 細片を含めて整理した結果、25枚を図化した（図83）。平面形態と孔の配置などにもとづいてA～D類に分類する（図82）。詳細は表15を参照されたい。

A類は上広下狭形で、もっとも多く16枚を数える。札頭は扁円頭形をなし、札足は隅切を呈する。孔の配置によって細分することができ、第2綴孔の下段2孔を綴・下搦兼用孔とする（初村武寛氏のご教示による）A1類と、第2綴孔とは別の下搦孔を2孔穿けるA2類がある。このほかに4はA1類とほぼ同じであるが、第3綴孔の下にもう1孔穿ける。覆輪孔か。B類は、札頭が円頭形を呈するもので、14がこれにあたる。C類は細長方形で、7枚を数える。札足側中央に1孔を穿け、覆輪孔として12のみ第2綴孔左側を3孔穿ける。穿け損じか。D類は札幅はC類と似るが、孔の配置はまったく異なる。2-bがこれにあたる。

小札の遺存状態は比較的良好で、裏面にキメ（1-c、4～9）や表側からの穿孔によるバリ孔（1-f、10～14）を確認できる資料もある。残念ながら草紐や組紐などの有機質はほとんど残っていないが、いくつかの資料には小札同士を綴じあわせた痕跡や、綴紐や緘紐らしき痕跡が

分類	A1類	A2類	B類	C類	D類
代表例					
綴孔列数	1列	1列	1列	1列	1列
綴孔数	(8孔)	8孔	8孔?	8孔	10孔以上
下搦・覆輪孔数	(2孔)	2孔	不明	1孔	不明
第3綴孔	あり	あり	あり	あり	あり
全長	5.9～6.2	6.1	(4.1)	7.4	(5.8)
最大幅	2.1～2.5	2.5	(1.9)	2.0～2.1	2.0

*単位はcm。()は残存値。●：綴孔 ●：綴孔 ●：下搦・覆輪孔

図82 小札型式分類

表15 小札計測値一覧

番号	分類	札丈	札幅	番号	分類	札丈	札幅
1-a	A2	6.1	2.5	7	A1	6.3	2.5
1-b	C	(6.7)	2.1	8	A1	5.9	2.5
1-c	A	—	—	9	A	(5.5)	2.1
1-d	A	6.0	2.5	10	A	(5.2)	2.2
1-e	A	6.2	2.5	11	C	7.4	2.0
1-f	C	7.4	2.1	12	C	(7.4)	2.1
2-a	A1	(5.4)	2.1	13	C	(6.2)	2.1
2-b	D	(5.8)	2.0	14	B	(4.1)	(1.9)
3-a	A	(5.1)	2.3	15	A?	(2.6)	(2.3)
3-b	C	(5.4)	2.0	16	A?	(3.7)	(1.8)
4	A	6.1	2.4	17	A?	(1.7)	(1.2)
5	A1	6.0	2.4	18	C?	(2.2)	(1.9)
6	A1	6.1	2.5				

*単位はcm。()は残存値。

認められ、未製品とは考えにくい。ただし、異なる形態の小札6枚が向きを違えて銹着している1をみればわかるように、小札甲は少なくとも廃棄時にはばらばらに解体され、甲としての機能を喪失していたものとみられる。

なお、本例は津野仁氏によって「薄い漆が小札の短軸半分にみられ、金漆塗りの可能性」（津野2010、132頁）が指摘されていた。そのためいくつかの資料について資料を採取し、赤外線分光分析（FT-IR）をおこなったものの（赤田昌倫による）、コシアブラなどの塗布を確認することはできなかった。

位置づけ 形態は多様であるが、いずれも綴孔1列で第3綴孔をもち、札幅も2.0～2.5cmにおさまるという共通点をもっている。SD1250からは奈良時代後半の土器や紀年木簡も出土しているが、7世紀から8世紀中頃にかけて札幅が徐々に細くなるという津野氏の研究成果を参考にすれば（津野1998）、天平21年（749）から天平宝字4年（760）の間に埋納されたとみられる東大寺金堂須弥壇出土品の札幅0.8～1.2cmよりも太い本例の製作時期は、奈良時代前半におさまるとみて大過ないだろう。

おわりに ここまで若犬養門付近出土小札甲について基

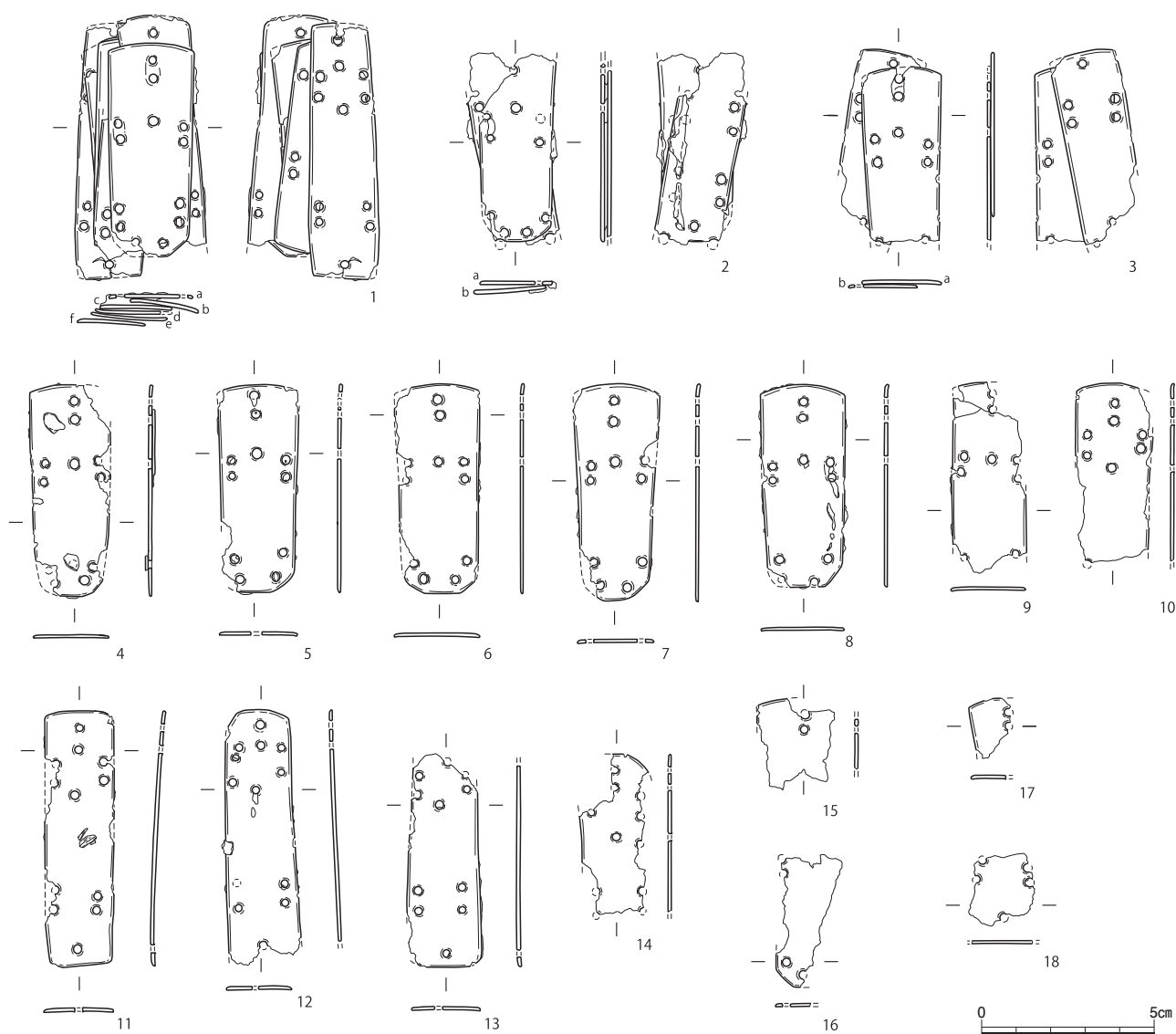


図83 小札実測図 1 : 2

礎的な整理を試みた。本稿がまだ実態のあきらかでない奈良時代武具研究の一助となれば幸いである。

なお小札の出土したSD1250からは衛士関係の木簡が集中して出土しており、この付近に衛士の勤務地があったと推定されている（鬼頭1983）。本例についても「宮城の警備にあたる衛士が、警備のために着用した甲の一部である可能性」（津野1998、86頁）が指摘されてきたところである。しかし今回の整理の結果、小札甲は溝に廃棄された時点ですでにばらばらに解体された状態であったことがあきらかとなった。使用に耐えなくなった小札甲をばらして廃棄した可能性もちろんあるが、小札の中には十分再利用に耐えうるものも含まれている点が留意される。似たような出土状況は最近、長岡宮でも確認されており、塚本敏夫氏は小札を用いた祭祀がおこなわれたとみる（塚本ほか2012）。SD1250からは人形や斎申な

ど祭祀に関わる遺物も出土していることをふまえると、本例についても、あるいはそのような観点で考える必要があるのかもしれない。（諫早直人）

謝辞

報告にあたっては小村真理氏、塚本敏夫氏、津野仁氏、初村武寛氏に大変お世話になりました。記して感謝いたします。

参考文献

- 鬼頭清明「平城宮出土の衛士関係木簡について」『木簡研究』第5号、1983。
 塚本敏夫・山田卓司・初村武寛「長岡京出土小札の再検討」『都城』23、（財）向日市埋蔵文化財センター、2012。
 津野仁「東大寺出土甲と古代小札甲の諸要素」『研究紀要』第6号、（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1998。
 津野仁「長岡宮跡出土の小札甲」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第84集、向日市教育委員会、2010。
 「南面正門（若犬養門）の調査（第133次）」『1981平城概報』。